

石川

ISHIKAWA PREFECTURAL  
MUSEUM OF HISTORY

# れきはく

No. 143

2023.7.13

# 霊

中世の祈り  
と  
みほとけ

# 場

いしかわの

令和5年度夏季特別展

令和5年

7/22 [土]

- 9/3 [日]

休室日/8月10日 [木]

石川県指定文化財  
木造 千手観音立像 (部分)  
平安時代 (10~11世紀)  
穴水町 明泉寺蔵



令和5年度夏季特別展

# いしかわの

# 霊場

中世の祈りと  
みほとけ



## 第1章 聖地をひらく

## 第2章 浄土信仰のひろまり



羽咋市指定文化財

銅製三鈷鏡

(福水ヤシキダ遺跡出土)

第1章

奈良～平安時代(8～9世紀) / 個人蔵

滅罪・雨乞いなどの修法に用いられた古密教の法具。古代の山林修行者の存在を示す。

第2章

木製笠塔婆

(千田北遺跡出土)

平安～鎌倉時代(12～13世紀)

金沢市蔵 / 金沢市埋蔵文化財センター画像提供

全国初出土の金箔押し笠塔婆。3基出土しており、それぞれに阿弥陀三尊の種子が1尊ずつ表されている。



後期展示 (8月11日～9月3日)

第3章

国宝 泰澄和尚伝

正中2年(1325)写 / 神奈川県 称名寺蔵 / 神奈川県立金沢文庫画像提供

白山を開山したと伝わる泰澄の代表的な伝記で、最古の書写本。

関連  
イベント

記念講演会

「霊場の成立と展開

—北陸を中心として—」

要申込

日 時: 7月29日(土) 13:30～15:00

講 師: 時枝 務氏 (立正大学文学部教授)

石川の歴史遺産セミナー (リレー講義) 「能登の中世霊場を探る」

要申込

日 時: 8月26日(土) 10:00～11:30 / 13:30～15:00

演題①: 「霊場の古絵図を読み解く —明泉寺絵図を中心に—」 10:00～11:30

講 師: 岡崎 道子 (当館学芸主任)

演題②: 「霊場の仏像に近づく —展覧会に向けての調査から—」 13:30～15:00

講 師: 杉崎 貴英氏 (帝塚山大学文学部教授)

学芸員による展示解説

申込不要

日 時: 8月5日(土)、8月20日(日) 各回13:30～14:30

令和5年

7/22 [土] → 9/3 [日]

休室日 / 8月10日 [木]

霊場とは、多様な人々の参詣を許す「開かれた聖地」です。その誕生は11世紀から12世紀に遡り、ちょうど中世という時代の成立期にあたります。特に12世紀は全国各地で霊場が成立しており、県下でも白山や石動山の霊場化がこの頃に起こったと考えられています。こうした全国的な霊場の後を追うように、より小規模で在地社会に密着した「在地霊場」も成立しましたが、戦乱や社会構造の変化に伴って一部は失われ、一部は江戸時代以降も存続しました。

本展では、中世の石川県における霊場の発生と展開を紹介し、参詣した人々の「祈り」を見つめます。

### 第3章 聖地から霊場へ

### 第4章 能登の在地霊場



第4章

珠洲市指定文化財  
木造 弥勒菩薩坐像

平安時代(11世紀) / 珠洲市 翠雲寺蔵

霊場珠洲岬にあった高勝寺(廃寺)伝来の像。珠洲岬は12世紀には修行者の集まる聖地であったとみられる。像高146cmと巨大。

第3章

中能登町指定文化財  
木造 十一面観音立像

南北朝時代(14世紀)  
中能登町 石動山天平寺蔵

院派仏師の作。石動山内の白山権現の本地仏と伝わる。石動山では五社権現として五柱の神を祀っており、白山権現はそのうちの一つ。



第4章

石川県指定文化財  
木造 千手観音菩薩立像

平安時代(10~11世紀)  
穴水町 明泉寺蔵

寺外初公開の秘仏で、明泉寺の信仰の中心。木芯を像のほぼ中央に込める。保存状態が良く、衣の襷には往時の彩色がわずかに残る。

ワークショップ

作って学ぶ! 金沢の遺跡

日本初出土の「金箔押し笠塔婆」の  
ペーパークラフトを作ります

日時: 8月6日(日)  
13:30~15:00

講師: 向井 裕知氏  
(金沢市文化スポーツ局  
歴史都市推進課主査)

要申込

## 資料 紹介

# 明泉寺文殊菩薩像版木の再発見

◆ 学芸主任 岡崎 道子

鳳珠郡穴水町字明千寺に所在する白雉山明泉寺は、白雉年間の開創を伝える真言宗の古刹である。同寺には中世以前の文献資料が伝存しないものの、堂内に残された多くの平安仏や、境内に林立する中世の石造遺物の数々から、かつて壮大な寺勢を誇ったことが推測される。しかしながら中世末期の時点で大伽藍は失われ、江戸時代には観音堂と寺屋敷を残すのみとなっていたようだ。貞享2年（1685）の時点で観音堂と寺屋敷以外の堂宇が失われていたことが、『加越能寺社由来』からうかがえる。

明泉寺の境内の様子がうかがえる資料は、中世末に成立したとみられる「明泉寺絵図」を除けば、江戸時代の紀行文が挙げられる。このうち、浅加久敬が元禄9年（1696）に記した『三日月の日記』には、明泉寺の宝物として「弘法大師のきざみ給ひし文殊像の板木ひとつ」が挙げられている。この資料について、近代以降に幾度か行われた明泉寺の調査ではその存在が言及されてこなかった。江戸時代の紀行文においても、元禄13年の余力堂勒文『珠洲之海』に「同（弘法大師作の）文殊の像の板木など残れり」とあるのを最後に、引用を除いて資料からは見えなくなる。安永6年（1777）の太田頼資『能登名跡志』には「行基菩薩・弘法大師の作仏多し」と記されており、あるいはこの中に含まれていただろうか。特別に記載されないことからすると、遅くとも18世紀後期には、この「板木」は忘れ去られたか、あるいは他の仏像類にも弘法大師作の由緒がついて、重要性が失われたとみられる。もとよりこの種の江戸時代の言説には信憑性のないものも多く、実在が確認されないこの「板木」について、これまで顧みられることはなかったといつていい。

令和4年12月、杉崎貴英氏（帝塚山大学文学部教授）・戸潤幹夫氏（元石川県立歴史博物館学芸主任）を調査指導に迎えて当館が実施した明泉寺調査で、この忘れられた宝物が再発見された。本尊千手観音立像が安置される観音堂で見つかったが、堂内に納められた巨大な仏像残欠や多数の天部立像に目を向けられがちで、これまで認知されていなかったものとみられる。発見時も、まさに仏像残欠の調査のため壇の上の仏像類を動かしている最中であっ

た。ただの木材と思い裏返して、菩薩の顔が目飛び込んできた時の驚きは記憶に新しい。

「板木」は菩薩像を彫ったもので、虫損により大部分が失われているが、幸運にも胸から上は残りが良い。像の彫られた面は墨のようなもので黒ずんでおり、裏面には幅4.8～5.3cmの溝が横に走っていることから、版木として使用されたことがわかる。

杉崎氏の見解に拠れば、菩薩の像容は、鎌倉・建長寺釈迦三尊像のような宋元仏画に描かれ、鎌倉時代以降の日本作例に継承されていった図様に含まれる文殊菩薩のそれに共通する。また、17世紀末の時点で弘法大師の手製と語られていることは、すでに版木の傷みが相当進んでいたようすを思わせるものがあり、制作は16世紀には遡るとみられる。

本資料の明泉寺への伝来は不明であるが、仮に中世の明泉寺で文殊菩薩の版木が使用されていたとすれば、中世霊場としての明泉寺を考えるうえで、新たな一石を投じることになるだろう。



文殊菩薩像版木（部分）明泉寺

# れきはく所蔵の考古コレクション

学芸員  
コラム  
Column

資料課長 三浦 俊明

石川県立歴史博物館では、歴史や民俗の資料に比べて数は少ないですが、考古資料を所蔵しています。石川県内の遺跡の出土品や能登で生産された中世のやきもの、珠洲焼が主な所蔵品です。新幹線や道路の建設など、開発の事前に行われる埋蔵文化財の発掘調査で出土した遺物は、石川県埋蔵文化財センターや各市町の教育委員会などの調査機関で保管されています。開発に伴う発掘調査の体制が石川県で整備されるのは1970年代で、当館で保管している考古資料はそれ以前の調査の際に出土したものが多く、前身の石川県立郷土資料館（1968～1986年）の考古資料を引き継いでいます。

近年、多量の考古資料2件が当館に寄附され、所蔵品を充実させることができました。石谷文夫氏の採集資料2,370点と堀本松雄氏の採集資料1,810点です。ここではこの2つの考古コレクションの概要をご紹介します。

石谷文夫氏は、昭和20～30年代に旧富来町（現、志賀町）で小学校の教員を務めながら町内の遺跡を踏査し、酒見新堂遺跡や鹿頭海岸の古墳群などを発見しました。また、昭和27～28年に行われた九学会連合の能登調査では、千浦二子塚古墳群（志賀町）などの発掘調査に協力しています。当館に寄附された資料は、石谷氏が昭和20～40年代にかけて採集した遺物で、その多くが『富来町史』資料編

（1974年）に掲載されています。特に、酒見新堂遺跡の注口土器（縄文時代後期）は、全体を復元できる同じ形の土器が県内で少なく、東北地方の影響が見られる貴重な縄文土器です。

堀本松雄氏は七尾市の出身で、小学生の頃から考古資料に興味をもち、遺物の採集を始めました。寄附された資料は県内各地の遺跡で採集された縄文時代の石器が大部分を占め、翡翠大珠などの縄文時代の玉類、弥生時代の銅鏃・ガラス小玉といった希少な遺物も含まれています。堀本氏は特に石器に興味があったようで、石谷氏の資料に比べて石器が多く、採集地は加賀市～珠洲市の県内全域に及んでいます。採集した資料の一部は、石川考古学研究会の会報にご自身で報告されています。

石谷氏と堀本氏は調査機関に所属していた考古学者ではないため、採集された遺物は発掘調査ではなく、遺跡のある場所の野原や田畑をくまなく歩いて拾い集めたとみられます。遺物には採集した場所や日付が両氏により記録されており、来歴の明らかな学術資料として利用できます。石川県の考古学の研究史をふりかえると、両氏のような在野の考古学者によって発見された遺跡や遺物が研究の基礎資料となってきました。お二人が採集したコレクションは、考古学研究の裾野を広げてきた地道な活動の歩みを物語っています。



注口土器（酒見新堂遺跡出土、石谷文夫氏採集資料）



堀本松雄氏採集考古資料



# 加賀藩右筆方・

は じ みなと

# 土師湊の金沢と江戸

学芸員 吉田 朋生

今回取り上げる土師家は、代々加賀前田家の右筆を務めた家である。右筆は、祐筆とも書き、その名の通り主君の側に控えて書状の執筆など書記に関わる仕事を行った。そればかりではなく、主君の姫君の婚礼御用などの重要な政務を任されていたことが、加賀八家の一つ長家に右筆として仕えた清水家の事例から分かってきた。清水家の古文書からは、土師家との右筆同士交流の様子を垣間見ることができる。今回は、そうした古文書を手がかりに、幕末期に活躍した土師湊という右筆の活動を追ってみたい。

## 一、土師湊の経歴

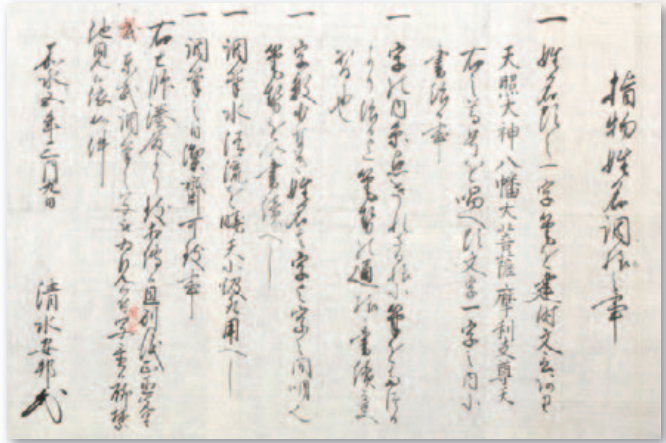
明治3年(1870)に提出された土師家の由緒帳から、土師湊(正順)の経歴を見てみよう。右筆を仰せ付けられたのは、家督を継いだ嘉永4年(1851)で、それ以前から藩主・斉泰の側近として江戸詰を経験していたようである。安政元年(1854)には御近習御用を仰せ付けられ、参勤交代にお供する重役を担った。その後、斉泰の嫡男・慶寧に仕え、京都や北越戦争に赴くなど幕末の動乱を生きた。

天保6年(1835)	前田斉泰の御側小将の新番並へと召し出され、江戸詰を仰せ付けられる。
天保14年(1843)	名前を余所之助から湊に改める。
天保15年(1844)	新知130石の拝領と御側小将を仰せ付けられる。
嘉永4年(1851)	亡父・清太夫の遺知500石を拝領し、御右筆を仰せ付けられる。
嘉永5年(1852)	御馬廻御使役を仰せ付けられ、御右筆方と兼帯。
安政元年(1854)	前田斉泰の御近習御用を仰せ付けられ、御右筆方と兼帯。 同2年の御参勤御供と同3年の御帰国御供を務める。
安政6年(1859)	御表小将御番頭と御奥小将御番頭を兼帯。
文久2年(1862)	御先手物頭を仰せ付けられ、御内御使者として京都へ行く。 前田慶寧の御附と金谷御広式御用を兼帯。
慶応2年(1866)	組頭並を仰せ付けられる。役儀御免除となるが、翌年帰役。
明治元年(1868)	北越戦争の際に越後へ出陣する。
明治2年(1869)	職制御改正に付、一等中士頭を仰せ付けられる。

## 二、金沢における土師家と清水家の交流

前田家に仕える土師家と、長家に仕える清水家は、前田家から見て直臣・陪臣という違いはあるが、同じ右筆の家として交流があった。天保14年（1843）に、21歳の清水万之丞（安邦）が記した日記が残っている。それによれば、万之丞はたびたび土師宅を訪れ、書の指導を受けている。その時、土師湊は15歳で万之丞より6歳年下であるから、その父・土師清太夫の指導であろうか。

さらに、土師湊と清水万之丞の関係が窺える史料として、【図1】の「指物姓名調様之事」が残っている。これは、土師湊が家督を継いだ翌年の嘉永5年（1852）に清水安邦（万之丞）が記したもので、指物（戦場で掲げる旗）に名前を記す際の心得である。頭文字を記す際に、天照大神などの尊号を唱えながら書くべきことや、調筆のための水は暁天（夜明け）に汲むべきことなどが書かれている。末尾に「右、土師湊殿より相伝致し候」とあり、土師湊から伝えられたものであることが分かる。さらに、東武（江戸）において湊はこれを筆写し、それをさらに万之丞が写したものだという。「聊か他見を禁ず」とあるから、まさに秘伝の書である。こうした内容を土師家と清水家は共有していたのであり、右筆同士の強いネットワークが形成されていたことが窺える事例と言えよう。



【図1】長家中清水家文書「指物姓名調様之事」（当館蔵、大鑑コレクション）

## 三、参勤交代での江戸滞在

以上は、金沢における土師湊の活動の例であるが、上記の史料が伝わった経緯からも分かるように、土師湊は江戸を訪れる機会があった。経歴を見ると、天保6年（1835）に前田齊泰の御側小将として召し出されてから、何度か江戸詰を命じられている。また、安政元年（1854）に齊泰の御近習御用を仰せ付けられ、同2～3年の参勤交代にお供している。その時の様子を記録類から見てみよう。

安政2年（1855）の3月27日、参勤の一行が江戸へ到着し、藩主・齊泰は本郷邸の御居間に着座した。近習である小川仙之助が残した日記によれば、その際、近習頭の面々がお祝いを述べるが、その中に土師湊の名がある。道中については、お供の勤め方を記した記録に土師湊らは「騎馬御供」とあり、馬に乗ってお供したようであるが（「御参勤御道中御供之面々勤方帳」）、これは帰国の様子を描いた【図2】とも合致する。



【図2】「安政三年齊泰侯江戸より御帰国御行列附」（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）に描かれた馬上の御近習頭

小川仙之助の日記から、江戸での土師湊の活動の様子を確認してみると、近習頭として仙之助ら近習の相談を受けたり、決定事項を伝達したりしている。例えば、安政3年の正月、齊泰の嫡男・慶寧の正室である崇姫（有馬頼徳の娘）が逝去した。そのことが公となった正月12日、近習による齊泰への御機嫌伺について、土師湊へと相談している。また、家老の横山蔵人（政和）が記した留帳によれば、齊泰の五男・利行が大聖寺藩主として襲封を認められた際に、土師湊を通して齊泰へ祝詞を述べた所、齊泰の御意が土師湊から伝えられた（「諸事留牒」安政2年7月12日条）。

このように、近習御用を勤めた土師湊は、藩主と他の藩士のやり取りを仲介する役割を担っていた。以上は、近習頭としての役割とも考えられるが、右筆という主君の側に控える役職の性質とも合致する。右筆を兼帯していない他の近習頭と役割に違いがあるのかどうかについては今後の課題としたい。

【主要参考文献】 亀田康範「参勤大名の江戸生活 — 小川仙之助「御参勤御供中日記」から —」（『石川県立歴史博物館紀要』第4号、1991年）  
拙稿「長家中清水家文書「嘉永五壬子入払帳」について — 祐筆の家計簿にみる金沢城下の暮らし —」（『石川県立歴史博物館紀要』第32号、2023年）

催し物  
案内  
Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。  
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

7月 休館日：7/19(水)～21(金)

- 5日(水) **古文書講座** (前期第3回)  
「今浜山田家文書にみる北前船の航海」  
講師：吉田 朋生 (当館学芸員)
- 15日(土) **れきはくゼミナール**  
「金沢の化け物屋敷」  
講師：大門 哲 (当館学芸主幹兼普及課長)
- 29日(土) **「いしかわの霊場 聴講無料/要申込」**  
「中世の祈りとみほとけ」記念講演会  
「霊場の成立と展開  
—北陸を中心として—」  
講師：時枝 務 氏 (立正大学文学部教授)

8月

- 5日(土) **要展覧会チケット/当日先着順**  
「いしかわの霊場  
—中世の祈りとみほとけ—」展示解説  
講師：岡崎 道子 (当館学芸主任)

8月 「いしかわの霊場」閉室：8/10(木)

- 6日(日) **「いしかわの霊場 参加無料/要申込」**  
「—中世の祈りとみほとけ—」ワークショップ  
「作って学ぶ！金沢の遺跡」  
講師：向井 裕知 氏  
(金沢市文化スポーツ局歴史都市推進課主査)  
日本初出土の「金箔押し笠塔婆」のペーパークラフトを作ります。
- 19日(土) **れきはくゼミナール**  
「加州刀工清光をめぐる言説について」  
講師：大井 理恵 (当館学芸課長)
- 20日(日) **「いしかわの霊場 要展覧会チケット/当日先着順」**  
「—中世の祈りとみほとけ—」展示解説  
講師：岡崎 道子 (当館学芸主任)
- 26日(土) **石川の歴史遺産セミナー 聴講無料/要申込**  
「能登の中世霊場を探る」  
「霊場の古絵図を読み解く—明泉寺絵図を中心に—」  
講師：岡崎 道子 (当館学芸主任)  
「霊場の仏像に近づく—展覧会に向けての調査から—」  
講師：杉崎 貴英 氏 (帝塚山大学文学部教授)

9月 休館日：9/4(月)～6(水)

- 16日(土) **れきはくゼミナール**  
「中世北陸の  
やきもの流通をたどる  
—能登・加賀を中心に—」  
講師：野村 将之 (当館学芸員)
- 23日(土) **れきはくゼミナール**  
「金沢城二ノ丸御殿を読み解く」  
講師：林 亮太 (当館学芸主任)

いしかわ歴史講座 受講無料/当日先着順 全8回

11月から1月、木曜日に実施。当館学芸員が、常設展示の内容を中心にお話しします。

れきはくゼミナール 受講無料/当日先着順 全7回

毎月1回～2回、土曜日に実施。当館学芸員が、独自のテーマを設定して講義します。

古文書講座 受講無料/要申込 随時開催

当館学芸員が、古文書の読み方や内容を解説します。

次回  
展覧会の  
お知らせ

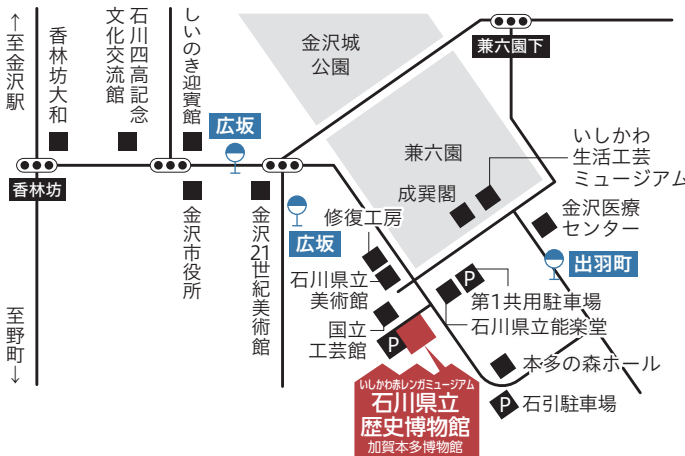
秋季特別展 御殿の美

令和5年(2023) 10/14(土)～11/26(日)

城において政治・儀礼・生活の舞台となった「御殿」。その内部は豪華絢爛な障壁画、金工品などで彩られ、権威を演出していました。本展では、名古屋城本丸御殿や二条城二の丸御殿など江戸時代初期に遡る貴重な遺物とともに、石川県のシンボル・金沢城二の丸御殿をめぐる最新の研究成果を紹介し、城郭御殿の室内装飾がもつ機能と美のあり方に迫ります。



重要文化財 二条城二の丸御殿 遺待 二の間障壁画 竹林群虎図 (部分) ▶  
狩野甚之丞筆 寛永3年(1626) 京都市(元離宮二条城事務所)蔵



いしかわ赤レンガミュージアム

石川県立歴史博物館  
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1  
TEL: 076-262-3236 FAX: 076-262-1836  
E-mail: rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp  
https://ishikawa-rekihaku.jp/



石川県立歴史博物館 広告

「石川れきはく」  
に広告を掲載して PR サービス・集客 しませんか?

れきはくメイト(友の会)会員、学校、博物館、図書館、その他公共施設へ 配布!!

ターゲットを狙った 知名度向上

石川県立歴史博物館の 信頼度の高い 広報媒体

お問い合わせは 株式会社 ジチタイド ☎092-716-1401

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F 財源確保 休業中

※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイド」に社分化しております。